

# 招魂社

吉田を歩く

今年には戦後70年に当たり、8月15日の「終戦記念日」を前に市内でも平和行事が計画されています。戦争遺跡としては、香取海軍航空基地に関する掩体壕や戦後、町村ごとに戦死者の慰霊のために建てられた忠魂碑・慰霊碑などがあります。

吉田地区のほぼ中央に熊野神社があり、それを背にして「招魂社」がまつられています。招魂社は幕末、明治維新期の戦争犠牲者を明治新政府が慰霊の目的で設立し、その後各地で建てられ、靖国神社や護国神社と改称されたとされます。

市内でまつられる招魂社はここ一社のみで、説明板には「招魂社のいわれ」として次のようにあります。明治45(1912)年に帝国在郷軍人会吉田村分会が招魂社を設立し、毎年4月3日の村の春季祭日に合わせて別名「三の午」と呼ばれる招魂祭を村民あげて行ってきた、と書かれています。本社の右側に高さ60cmほどの供養碑があり、同村出身者が明治10(1877)年の西南戦争に出征し現在の熊本県山鹿市で戦死したことが刻まれています。生家の墓所にあった碑が招魂社がまつられたことでここに移されたのでしよう。市内でも西南戦争への出征兵士があったことは伝承されていますが、こうした供養碑があるのは珍しいことです。

37(1904)年から翌年の日露戦争の出征軍人33人の名前が刻まれ、並木栗水が題字を書いています。栗水は江戸時代後期に香取郡御所台(現在の多古町)に生まれた儒学者で、晩年は郷里で私塾を開き多くの門人を教育しました。吉田村にも栗水の門人がいたとされることから、この碑にも関係したのでしょう。

日露戦争に出征した同村の兵士が戦死した、と生家に連絡があったものの、生存して帰郷したので、当時の千葉毎日新聞に「挺身隊の勇士」と報じられました。この人は後に吉田村在郷軍人会の会長や村長を務め、招魂社の設立に尽力したのでしよう。

明治30年代後半から大正時代にかけて郡教育会や町村で郷土誌の編集が進められ、村誌などには日清・日露戦争での戦没者名が掲載されるようになりました。

吉田の招魂社にまつられる戦没者は114人。現在は招魂社をまもる会が護持に努めています。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課広報聴班

☎ 73・0080



114人の戦没者がまつられる吉田の招魂社

念碑には、明治